







うらまち周辺は、松本が城下町として都市計画された時から、寺社が多く並ぶ場所だ。正行寺は、明治政府により神仏分離令が出された際、当時の23世住職佐々木了綱が強く抵抗し、廃寺を防いだことでも知られている。松本藩の廃仏毀釈は全国的にみてもとりわけ厳しかった。そんななかにあつて、了綱は独自の情報網から、松本藩の様な廃仏が全国的に行われている訳ではないと見抜いていたようだ。

正行寺は、真宗大谷派の寺で、開基は



佐々木四郎高綱、法名釋了智。佐々木高綱は源平合戦の宇治川の戦いにおいて激しい先陣争いをした逸話で有名な武将だが、のちに出家して親鸞の門弟となり、島立南栗林に正行寺を開いた。

13世浄珍の時代、石川氏が松本に入城し、石川氏の菩提寺として松本城下に移された。慶長年間、現在の場所に移転。

石川数正・康長公との縁が深い事から、康長公の祥月命日である12月11日には康長公が朝夕礼拝をしたという阿弥陀



如来像の念持仏法要を行なっている。ほかに、寺の行事としては親鸞聖人の命日におこなわれる報恩講、ひと月に一度の親鸞講座、同朋の会など。

現在コロナ禍により、親鸞講座と同朋の会は休止中。しかし、ご自身がもともと師との出会いによって仏門をたたくことになったご住職。本来、寺は仏の教えを聞く場所だとの考えから、法座をきちつと開いて、仏の呼びかけを通して共に歩むのが勤めだと思っていると語ってくれた。

## 正行寺

TEL. 0263-32-5653  
松本市大手5-6-36

上：取材時はちょうど桜の見頃だった。本堂は普段鍵がかかっているが、横の玄関から一声かけて入ることが可能。  
中：乃木將軍の像。先祖（佐々木高綱）が建立した寺ということで、了綱の時代に3回訪れたそうだ。  
下：現住職の第27世佐々木一男さん





店の入り口には、こんこんと水が湧き出ている。地域の人が入れ替わり立ち代わり立ち寄り、水を汲んだり、お店のお母さん穂高早智子さんと井戸端会議をして行ったりする。そんな活き活きとした暮しや昔ながらの松本を感じられる、格別の場所だ。

この水は、隣の造り酒屋善哉酒造の仕込み水として使われている。それまで使っていた井戸の水量が減り、新しく井戸を掘った昭和62年、わざわざ店先まで水を引き、地域の人にも汲めるようにしたそうだ。

もともと明治25年から穂高家が営む穂高醸造店という酒蔵だった。戦争中は酒の醸造もかなわず、戦後になっても酒造の許可がおりる酒蔵は限られていた。復活蔵として他の3蔵と合わせてようやく許可が降りたのが昭和32年。その時名乗ったのが善哉酒造だ。酒作や販売は大手に有利で、ちいさな酒蔵は随分苦労したという。

店舗「穂高酒店」は別会社で、善哉酒造以外からも酒を仕入れて販売していた時代もあったようだが、今は主に善哉酒造の酒のみを売っている。お母さんの説明を聞き、試飲などさせていただきながら選ぶのが楽しい。お酒を飲めない方には甘酒もおすすめ。

## 穂高酒店

営業時間 9:00~19:00  
TEL.0263-32-0013  
松本市大手5-4-24

うらまち  
界隈

山と里と街なかを繋げる

## お酒「山瑞」

松本市内、市街地の真ん中を流れる女鳥羽川。川のある街の景色は広がりを感じて気持ちがいい。

松本市街地には多くの湧水もあり、それが町の誇り、魅力や観光資源にもなっていると感じる。さて、あなたはそれらの川の源流や、水を蓄える山々について考えたことはあるでしょうか。

生き物が日々命を繋いでいくために絶対必要な水と空気を生み出しているのは、山やそこに生える樹々なのに、それを意識できている人が少ないのでは？と語る柳沢林業株式会社の代表 原薫さん。柳沢林業は、その名の通り、林業の会社ですが、うらまちにも程近い善哉酒蔵さんの協力を得て、社員自らも働き手となって酒を醸し、販売を始めた。

使用するのは、自社で栽培をした無農薬・無施肥の酒米、山恵錦。田を起す際には、社内で飼育している馬が馬耕している。田んぼがある松本市岡田は女鳥羽川の源流から水が繋がっている。これは酒の仕込み水の水系とも同じなのだそう。つまり、水の源を辿って、山里・街それぞれの場所です社員が働くことで出来た酒。

美味しいお酒を味わいながらも、水に、空気に、そしてそれらを生み出す源としての松本の山や樹々に想いを馳せてもらいたい。そんなお酒なのです。

※山瑞は柳沢林業・穂高酒店 他

松本市内の酒屋で限定販売中



